



いよいよ1期生が最終学年 正念場迎える国試対策

6年制薬学部の“目玉”である長期実務実習がスタートしたが、現場には、なかなか表に出てこない不満もくすぶっているようだ。今年はいよいよ1期生が最終学年。来春の国家試験に向け、大学はいよいよ対策に本腰を入れる時期が来た。しかし……。

薬学部が6年制に移行する際に最も懸念されていたのは、長期実務実習が本当に実現可能なのかという点だった。4年制のころは、実務実習といってもせいぜい1カ月程度。内容的にも見学の域を出ていなかったからだ。

幸いにもその懸念は杞憂に終わったようだ。本誌調査でも、薬局、病院・診療所共に、長期実務実習は「良いことだ」と思うし、協力したい」との回答が過半数を超えた(Q3)。病院・診療所に勤務する薬剤師に限れば「良いことだ」と思うし、協力したい」が7割を超えて

いた。

その半面、なかなか表には出てきにくい、実習先の“当たり外れ”を指摘する声もある。

関東地方のある6年制薬学部の教員は、「中には“新人いじめ”を“指導”と勘違いして、『実習先で怖い目に遭った』と言ってきた学生もいた。入社後の新人研修ならまだしも、こちらが実習費を払っているのに、そんな経験は学生にはさせたくない」と憤る。

教育の一環として長期実務実習が行われている以上、実習先の薬局や

病院に丸投げするわけにはいかないのは当然だが、遠方にある実務実習先を訪問する教員の負担も大きい。

かなりハードな新・国家試験

長期実務実習を終えた今年、1期生はいよいよ最終学年になる。当然ながら気になるのは、来年春に実施される6年制での初の薬剤師国家試験だ。

国試の科目や問題数は、4年制とは大きく変わる(COLUMN 01)。科目が増えることから総問題数は240問から345問へと大幅アップ。必須問題は各科目で50%の正答が条件となるなど、“足切り”の点でも厳しくなる。

新潟薬科大薬学部長の北川幸己氏は、「2012年の薬剤師国家試験合格率は注目度が高く、事実上、6年制薬学部の“番付”となるのではないかとはいえ何しろ初めての試験なのでノウハウがなく、対策に頭を痛めているところ」と打ち明ける。

薬剤師国家試験の合格率は、新卒の受験者がいなかった2010年を除くと、この10年間、ほぼ70～80%で推移している(図3)。薬剤師国家試験予備校のメディセ代表取締役社長の児島恵美子氏は、「国試の出題基準は大きく変化するが、重要な点は変わらない」と話す。

児島氏が心配するのは、学力よりもむしろメンタル面だ。「今の学生は、勉強はしているのに、本番で力が出せないタイプが多くなった。特に入試の偏差値が従来より低くなった6年制薬学部では、学生に対して、2日間にわたって集中力を維持できるかというところから対策を考えなければならない。国試に対するプレッシャーに打ち勝つだけの精神力が必要になる」と強調する。

薬剤師需給との関係は?

大学側にとって、自校の国試合格率を高める対策には二つある。一つはもちろん、学生をしっかり教育し、国試に合格できるだけの実力を付けさせるこ



メディセ代表取締役社長
児島恵美子氏

「国試のプレッシャーに打ち勝つ精神力が必要」

と。もう一つは、受験する人数を減らすことだ。受験者数(分母)が減れば、合格者数(分子)が減っても合格率は保てる。実際、その傾向は既に現れており、6年制薬学部がスタートした2006年度の入学定員に比べると、2010年度の5年次在籍者数は約8割に減った。中には1学年の20%以上を留年させている大学もあるという。

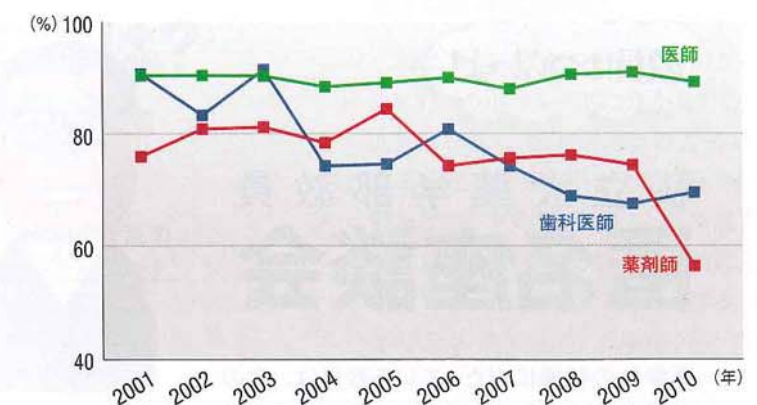
ある新設薬学部の教員は、入学はしたものの勉強する習慣が身に付かず、学力の向上が見込めない学生に対して、国試に合格できる可能性が低いことを早めに伝え、進路を考え直す機会を与えている。「入学後、半年もたてば学生の資質はほぼわかる。それなのに親が『薬学部に入ったら薬剤師になれる』と思い込んでいるため、結果的に留年を重ねる学生もいる」そうだ。

だが、国試の合格率は、必ずしも個々の学生の頑張りだけで決まるわけではない、ともいわれている。

図3は、この10年間の国家試験の合格率を、薬剤師、医師、歯科医師で比較したもの。前述のように、薬剤師の合格率はこの間ほぼ70～80%。それに対して、医師の合格率は90%程度で高い水準で推移している。逆に歯科医師はこの間、低下傾向が明らかだ。このことは、医師は不足、逆に歯科医師は過剰が指摘されていることに不思議と符合する。薬剤師国家試験の合格率を占うには、薬剤師の将来の需給関係も検討しておく必要がある(24ページのインタビュー参照)。

ちなみに本誌が2009年1月号で行った試算では、薬剤師は2020年時点で3万～6万人が過剰との結果だった。ということは……。

図3 医師・歯科医師・薬剤師の国家試験合格率の推移(出典:厚生労働省)



薬剤師の合格率は70～80%の間で推移している。2010年の合格率が56.4%と低かったのは、6年制との端境期で新卒がいなかったことが関係していると思われる。医師国家試験合格率は90%前後で推移。一方、歯科医師国家試験合格率は低下傾向にある。

COLUMN 01

新・薬剤師国家試験とは?

6年制への以降に伴い、薬剤師国家試験も大きく変わる。昨年9月30日に、「薬学教育モデル・コアカリキュラム」および「実務実習モデル・コアカリキュラム」の内容を基本とした出題基準が示された。

新しい国家試験では、試験科目が現行の4科目(「基礎薬学」「医療薬学」「衛生薬学」「薬事関係法規および薬事関係制度」)から、「物理・化学・生物」「衛生」「薬理」「薬剤」「病態・薬物治療」「法規・制度・倫理」「実務」

の7科目に増え、問題数も240問から345問へと1.5倍近くになる。一方で、試験日数は2日間と変わらないので、受験生にとってはかなりハードな試験になりそうだ。

特徴的なのは、「複合問題」と呼ばれる、薬学の基礎知識と実践的な問題解決能力とを総合的に問うタイプの問題が多数出題されること。単純な知識力ではなく、添付文書などの情報の活用や解釈を含む、科目の壁を越えた理解力が問われることになる。

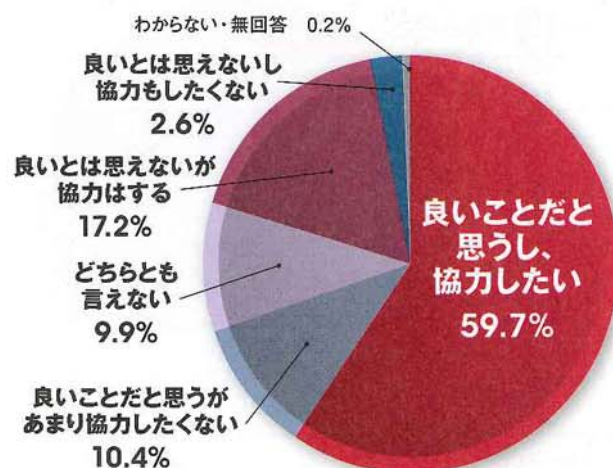
表3 新・薬剤師国家試験の科目、問題区分出題数(出典:厚生労働省)

科目	必須問題	問題区分		出題数計
		一般問題	薬学実践問題	
物理・化学・生物	15	30	15(複合問題)	60
衛生	10	20	10(複合問題)	40
薬理	15	15	10(複合問題)	40
薬剤	15	15	10(複合問題)	40
病態・薬物治療	15	15	10(複合問題)	40
法規・制度・倫理	10	10	10(複合問題)	30
実務	10	—	20+65(複合問題)	95
出題数計	90	105	150	345

注) 薬学実践問題は、「実務」20問、およびそれぞれの科目と「実務」を関連させた「複合問題」130問から成る。

[合格基準] 以下のすべてを満たすこと
① 全問題への配点の65%を基本とし、問題の難易を補正して得た実際の総得点以上であること
② 一般問題について、構成する各科目の得点がそれぞれ配点の35%以上であること
③ 必須問題について、全問題への配点の70%以上で、かつ、構成する各科目の得点がそれぞれ配点の50%以上であること

Q.3 長期実務実習についてどう思いますか?



(本誌調査、n=647)

現場の薬剤師は長期実務実習に協力的